

# みめじみの

第22部





# みめじみの

## 第22部



大谷光道著

### 目次

親鸞聖人（その二）	2
末法思想	2
ハルマゲドン？	4
末法元年	6
新仏教の祖師方	8
『末法燈明記』	10
今あるもので当座をしのぐ	14
「守れない」だけでは すまされない	17
栄西禅師と親鸞聖人	19
生臭だけではない	21
結び	23
読者の頁	24
あとがき	31

# 親鸞聖人（その三）

## 末法思想

親鸞聖人は九歳で得度を受けられました。幼くして両親を亡くし、人より早くから世の無常を強く感じておられたことが、その動機だったと言われています。

範綱のりつなという伯父しやうれんいん様に伴われて青蓮院じちんかしやうの慈鎮和尚のところへ得度を願い出られたときのことでした。もうすでに夕方だったことから、「では、明日得度をしてやろう。」との和尚の返事に、幼い聖人が、



「明日ありと思ふ心の徒桜、夜半に嵐の吹かぬものかは」

（明日があると思つていてもそれは空しいことで、この世は散りやすくはかない桜の花のようなものである。夜中のうちに嵐が吹かなければいいのだが。）

と、詠まれたという有名な話があります。その利発さに驚き、熱意に負けた和尚は、もちろんその場で得度をしてくださったのですが、得度を早くしてほしいという願いを述べる中にも世の無常が題材となっていて、いかにも当時の聖人のお心持ちが表れているように伺えます。

また、聖人が生まれられたころは、保元・平治の乱をはじめとする戦乱や災害が絶えず、まさに「世も末だ」という厭世観が世の中じゅうに広がっている時代でした。

仏教では、お釈迦様が入滅されてから後、時とともに仏法が廃れていき、人の心が乱れて世の中が悪くなっていくと考えられています。お釈迦様とい

う太陽を失うのだから世の中が暗くなるのは当然といえれば当然ですが。こういう考え方というか世界観を、末法思想まつぽうとか正像末しょうざうまつの三時思想さんじなどと言います。当時は一般に永承七年（1052）が末法元年であると考えられており、世の中の現象とびつたりと一致していたことになります。

## ハルマゲドン？

別ですが、一時「二〇〇〇年がハルマゲドンだ。」とよく聞きましたが、二〇〇〇年を超えたら急に聞こえて来なくなりました。ハルマゲドンというのはキリスト教での世紀末思想（『新約聖書ヨハネ黙示録もくしやく』）で、「世界の終末に起こる善と悪との勢力の最後の決戦の場所」という意味が転じて「世界の終わり」という意味になったのだそうで、その後新しい世界ができると考えるようです。

ただ、「二〇〇〇年」というのはキリスト教での根拠ではなしに、ノスト



ラダムスという人（フランスの占星術師、医者・1503-1566）が「11000年がハルマゲドンだ。」と予言しているのだという話から「2000年」が騒がれたのですが、いつの間にかこの言葉も忘れられてしまった感があります。あと五年、あと二年、あと何ヶ月と迫ってくるときには、「どうなるのだろう。」と「予言」には迫力がありますが、何もなくすんでしまおうと忘れられるのも当然のことでしょう。

仏教でいう末法思想はこれとはだいぶん趣が異なります。世界はだんだん悪くなっていくと考えるのではなく、物理的に世界が終わったり、次の世界ができたりというわけではありません。末法思想は、人間の宗教的資質が時とともに低下して、仏教を受け入れなくなっていく、それによって世の中も荒んでいくという時代観です。

話が横に行ってしまったが、永承七年のところに戻って、なぜこの年が末法元年だと考えられたのか、のお話に移りましょう。

## 末法元年

仏教は、教え（教）きょうを実践し（修行、行）ぎょう、それによって覚りを開く（証）しやう教えですから、この教、行、証、の三つが必要不可欠です。

お釈迦様がご入滅になって最初の五百年または千年の間は「正法」しやうぽうの時代と言われ、お釈迦様がおいでになった時と同じように、これら教、行、証、の三つが整っていた時代です。つまり、教えがあり、それを実践する人があり、それによって覚りを開く人があつた時期です。

次の五百年または千年の間は「像法」ざうぽうの時代と言われます。「像」とは、「形を似せた」という意味です。この時期になると、教と行はあるものがなくなる、つまり教えを実践する修行者は存在するのですが、覚りを開く人がいなくなる時期です。

さらにこのあと「末法」の時代といわれる一万年は、教だけあつて行と証



がなくなる、つまり、修行をする人までもいなくなる時代です。因みに、さらにこの末法の一万年を過ぎると「法滅」の時代となって、教えすらもなくなってしまうと考えられています。

このように、時とともに人々の心が衰えていくと考えるのが正像末の三時思想といわれるものですが、各時代の長さについて、たとえば正法を五百年とするか千年とするかなど、いくつかの説があり、またお釈迦様のご入滅の年代についてもいくつもの説があるので、いったいいつからどの時代になるのか、一概には決められません。

親鸞聖人は元仁元年（1224）を末法に入って六八三年と計算されています（『教行信証』）。この計算で行くと、我が国に仏教が伝来した時点（五三八年。五五二年説もある）が既に末法の入口であったということになります。

ただ、当時一般的には正法千年・像法千年説がよく行われ、これによると永承七年（1052）が末法元年になります。ちょうどこの頃から災害や戦乱な

どが多くなったため、「いよいよ、末法到来……。」という危機感が世の中に広がりました。

## 新仏教の祖師方

皆様方の宗祖・栄西禪師（1141-1215）は、私どもの宗祖・親鸞聖人（1173-1262）より二十年ほど前に出られたお方ですが、鎌倉時代には新しい仏教運動の花が開き、このほか法然、道元、日蓮、一遍などの各祖師があら前後して出られました。

それまでの仏教は、奈良時代に興った六つの宗旨と平安時代に興った天台宗、真言宗で、どちらかというところと貴族中心の教えだったのに対し、鎌倉新仏教の祖師方はいずれも伝統的な仏教を学んだ上で、念仏、坐禅、題目という一つの行を中心にして教えを体系付けられ、やがてそれが民衆に浸透していったものと言えるでしょう。そして各祖師方は、例外なく皆比叡山の延暦寺

で学ばれました。

ここでこんなことを思い出しました。ずっと以前、「延暦寺の山号を知っているか？」って聞かれたことがあります、おそろおそろ「比叡山？」と答えたことがあります。今のお話の本筋とは関係ありませんが、お寺はたいがい山号というのを持っており、〇〇山××寺というのがふつうです。比叡山というのはもちろん山の名前ですが、延暦寺の山号でもあります。

さて、このころは先ほどからもお話しているように、戦乱や災害が続き人々の心がどんどん荒んでいくという危機感、それをどうして食い止めたらいいのかという焦燥感が世の中に満ちあふれていた時代です。仏法に携わる者としては、「像法が終わろうとしているのだ。」「いや、もうとっくに末法に入っているのだ。」という認識のもとに「像法の終わりや末法には仏法はどうあるべきか。」「僧たちはどうあるべきか。」という悩みは切実なものでした。それに真正面から答えたものとして、伝教大師・最澄（日本天台宗の

開祖、延暦寺の基を築く・(767-822) の作と伝えられる『末法燈明記』は、  
きわめて貴重な書でありました。

ここで、「伝えられる」というのがだれしも引っかけるところで、つまりそれは「ひよっとすると偽物かも知れない。」——「最澄」をかた騙って誰かが書いた——ということですね。本物説・偽物説の議論される中で、栄西禪師と親鸞聖人は、法然上人や日蓮上人とともに本物説を支持された「お仲間」でした。もちろん、法然上人と親鸞聖人は師弟の関係ですからともかく、それぞれ時代も少しずつ違うので、これらの祖師たちによって『末法燈明記』の支持派の会合が持たれた」などということではなく、各師が本物として引用されたということです。

## 『末法燈明記』

『末法燈明記』はその題のごとく、まさに「末法の世に明かりを灯す」書



伝教大師・最澄

で、親鸞聖人はその主著『教行信証』でかなりのスペースを割いて引用し、

「この濁った世の中に生きている者たちは今が末代という特別な時代であることも知らず、僧・尼の威儀いぎ（作法にかなった立居振舞）の乱れていることを誇そしっている。今の時代の出家も在家も自分の置かれた立場をよく考えよ。」と、時代認識の大切さを強調し、この『末法燈明記』を紹介されます。

「……将来、末世になると、仏法によって出家したはずの比丘びく（僧）や比丘尼びくに（尼僧）が、自分の子供の手を引いて一緒に遊びに出かけ、酒屋から酒屋へと飲み歩くことだろう。彼らは仏法に仕えながら、淫みだらな行ないもするようになるだろう。」と。

今の時代で考えてもどきつとするような部分もあるくらいで、当時この書を開いた人は大きな衝撃を受けたことでしょう。そして、

「……将来、末世においては、名ばかりの僧（形だけの僧、外見だけ



の僧）でも、世の導師とするようになるのである。」と。

このような僧でも導師になるといふ、さらに驚くべきことです。そして、このような状況を黙認するにとどまらず、積極的に受け入れよという話に進むのです。

「末法には、無戒むかいみょうじ名字の僧（戒を知らない、名ばかりの僧）をこの世の真の宝とせよ。このほかに福田ふくでん（仏や僧を生み出す元になるもの）はないのである。もし末法の時代に戒たもを持つ者がいるというなら、それがすでに怪しいことだ。『街の中に虎がいる。』と言っているようなもので、そんなあり得ないことを誰が信ずるだろうか。」と。

ここで、「無戒」に補足がついています。

「末法の時代はただ教えだけがあってそれを修行する者もいなければ、また覚る者もない。もし戒法があるならばまた破戒はかい（戒を破る）もあるだろうが、すでに戒法すらない。どんな戒を破るからと言って破戒が

あると言ふのだろうか。」と。

「破戒」は「戒を破るのだから悪い」と直感的でわかりやすいのですが、「無戒」というのはさらにそれを通り越してしまっているので、良いとも悪いとも判断のしようがありません。「無戒」を悪いというのは、〃良いこと・悪いこと〃を教えていない子供を叱りつけているようなものです。ですから、「無戒名字の僧」とは、「戒というものがあることそのものを知らない、名ばかりの、格好だけの僧」ということになります。このような僧をこそ大切にせよ、というのが『末法燈明記』の結論です。

### 今あるもので当座をしのぐ

もう少し、『末法燈明記』の比喻を見てください。

「たとえば、一般世間では金を無上の宝とする。そこでもし金がなければ銀を無上の宝とするだろう。さらにもし銀がなければ真鍮しんちゆうを無上

の宝とするだろう。もしそれ  
もなければ銅・鉄・白鐵びやくろう（銅  
と亜鉛の合金）・鉛を無上の  
宝とするだろう。同じように、  
仏法では仏が無上の宝である。  
もし仏がおられなければ縁覚えんがく  
が無上の宝であり、もし縁覚  
がいなければ羅漢らかんが無上の宝  
であり、……、もし清らかに  
戒を持つ人がいなければ破戒  
の僧が無上の宝であり、もし  
その僧がいなければ髪を剃り  
袈裟をつけた無戒名字の僧が



無上の宝とされるのである。

欲望のために自らを駄目にしていく多くの世間の人たちは、この名ばかりの僧でも恐れおののくから、その存在意義があるのである。もしこの名ばかりの僧でも護り養って大切にするならば、この僧でも遠からず無生法忍（不生不滅の眞実をさとる）の位を得るだろう。これをまとめると、八重の無上の宝があつて、第一は如来、第二は縁覚、第三は声聞しやうもん、第四は前三果の賢聖けんじやう、第五は禪定の凡夫ぜんじやう、第六は持戒の僧、第七は破戒の僧、第八は無戒名字の僧である。はじめの四つは正法の時の宝であり、次の三つは像法の時の宝であり、後の一つは末法の時の宝である。これによつて破戒の僧も無戒の僧もみな時代の眞の宝なのである。」

いくつもの位が出てきて煩雑になりましたが、「いくつもランクがあるのだなあ。」という程度に聞いていただければ結構です。要するに「今ある一番ましなものを大切にせよ。」ということですよ。今はたまたま「末法」とい

う大きな課題を考えているために特別のこのように思えるだけで、よく考えてみると、これはどんなことにでも当てはまります。

たとえば、自動車でタイヤがパンクしたらスペアタイヤに交換します。このごろのスペアタイヤは、黄色い鉄の円板に自転車のように細いタイヤのついたぺらぺらのタイヤです。ご存じでしょう。注意書きには「八〇キロ以上は出さないください。」とありますが、六〇キロでも怖いような、いかにも危なっかしいタイヤです。でも、一応走れます。「無戒名字」の僧は、これのようなもので、ちゃんとしたお坊さんの代用品だと考えてください（笑い）。

## 「守れない」だけではすまされない

戒を守り己を律することを覚りに至る必修条件とする教えの場合は、破戒は許されず、まして無戒など論外です。戒を守るとするのは修行の一種です

が、先にも触れたように、浄土真宗はそもそも自分で自分を励まして修行する（自力の行）ことのできない人——つまり「いづれの行も及び難き身（私）」——のための教えなので、はじめから戒にはご縁がないのが浄土真宗なんです。この、戒にはご縁のない、文字通りの生臭坊主でも末法においては「一番まし」なものだから、最上の宝としてくださるといのが今の『末法燈明記』でした。

ただ、戒が守れないというだけでは、ただのわがまま、だだっ子ですが、さらに進んで「これを補って余りをもたらず」のが「念仏の信心である」というところへたどりつく——念仏の信心によって、戒の守れないことの埋め合わせをして、さらにお釣りが来る——のが、親鸞聖人の教えの要ということになります。無戒名字が、外から中まで皆、完全に無戒名字のままだったら、やはり救われません。念仏の信心という「芯」、「筋金」を頂戴することを教えるのが浄土真宗です。



さきに私は、「浄土真宗では機——教えを受ける人の宗教的能力——ということを重視する」と言いました。聖人は、お書きになったものの随所に末法の機には浄土真宗・念仏の教えがびったりしているのだ、と力説されています。「末法には念仏しかない」というのが宗祖の教えです。

## 栄西禅師と親鸞聖人

禅と念仏という一見正反対にも見える教えが、しかも同じ時期に盛んになったのは、やはり不思議です。

栄西禅師について私は、『興こうぜんご禅護国論』を著して、戒律の重要性を説き、禅を興すことによって国を守護することになると教え、禅の正宗としての独立を主張された」という程度の字面の上のみの知識しか持っておりませんが、同じく末法の危機に立って仏法の興隆に心を砕くに当たって、戒律について逆の認識をされた点が、お二人の違いの一つということになります。考えて

みれば、何かの危機に直面したときに、二つの逆の対応策を取る人が出てくるのはどんなときでもあることで、むしろ自然のことなのかも知れません。

聖道門で修行をされている皆様がおいでいただくことが私たちの励みになっていることを、今まで無意識には感じていましたが、薪流会の皆様方とお付き合いをさせていただく中で、これが次第に意識化されてきました。私たちが「いづれの行も及び難い」と言う前に、その行に及ん



でられる、または及ぼうとされている方々がおいでいただくという確たる現実が、何ともありがたいのです。一方に「有戒（持戒）」があつてこそ「無戒」が実感できるのであつて、もし本当に『末法燈明記』のように戒を持つ<sup>たも</sup>人が完全にいなくなったとすると、「無戒」とは何なのかもわからなくなつてしまふということに気づかせていただきました。

### 生臭だけではない

今までのお話だけだと、浄土真宗っていうのは「もう、生臭の総本家みたいなもんやないか。」と、お感じになるかも知れません。そこで、今詳しいお話しをする時間はありませんが、私どものご先祖が特に厳しかったことの一、二を付け加えておきます。

まず一つは、「家内安全、商売繁盛、病気が治る、安産、合格……:とというような、いわゆる現世利益——精神性の乏しい幸福——を求めて、お願い

——おねだり——するために念仏を称えるものではない。浄土真宗の念仏は、私たちが信心をいただいたそのお礼の念仏なのだ。仏様（阿弥陀様）は私たちに、物事を正しくありのままに見せ、やるべきことに勇気を与えてくださるお方であると心得よ。」と教えられました。

もう一つは先祖供養についてです。親鸞聖人が「父母ぶもの孝養きょうよう（親が生きているときと亡くなってからの親孝行）のために念仏をしたことは一度もない」と仰った（『歎異鈔』）ように、念仏は先祖を供養するためのものではないということです。「（先程からのお話の如く）いづれの行も及び難き身なので、亡くなった父や母を成仏させる力などあるわけがない。それよりもまず、自分自身が成仏することに専念しなさい、それが先なんだ。」というのが、聖人のお考えです。ですから先祖供養をしてはいけないと言うんじゃない、先祖供養をしようとする事によって力の及ばない自分を見いだすこと、これが浄土真宗の先祖供養に対する考え方です。

熱心なご門徒（信者）は、これらのことに徹底した生活をされていますが、この二つに関しては気になることが時々あるので、よくお話しています。

## 結 び

こんなことで、「禪と念仏は水と油だが、決して犬と猿ではない。」ということをお願いして、結びといたします。

なお、今日は私どものところの若手僧侶たちも皆様方の中に入れていただき、私共々大いに良い刺激を受けることができました。今後、より深い交流をお願いいたします。存じます。

【完】

質疑  
応答

神奈川県相模原市 東 一雄さん

質問

阿弥陀仏信仰を求め、迷いに迷って三年になる者です。親鸞聖人の所謂『悪人正機説』に聖人は悪の歯止めをどのように考えておられたのかご教説頂きたく存じます。

歯止めがなければ、必ず救われるのですから、やりたい放題の人生を送る方がよいと多くの方が考えるのではなからうかと思われるからです。もつともお釈迦様は八正道をお示しになっておられますがそこにおける正し



いと判断する基準は何なのか、仏様なら判断できましようが、凡夫である人間には不可能に近いことです。なるが故に聖人の説かれる浄土真宗などの思想が出て来たのでしようが……地獄極楽説は現代的ではありませんし……。

**答**

ご質問の中身がたいへん盛りだくさんで、すべてにお答えすることは至難の業に思われます。ただ、詮ずるところ、親鸞聖人が「悪の歯止め」をどのように考えておられたかという点につきると思われるので、そのあたりを考えてみようと思えます。

実際に、親鸞聖人はもとより法然上人も、さらには聖人以後のご歴代も、東さんご指摘——「阿弥陀仏の本願によって）必ず救われるのだから、やりたい放題の人生を送ってもよいのだ。」——のような人たちが現れてきて、た

いへんご苦勞になったことが伝えられています。聖人や覚如上人等のお書きになったもの（末燈鈔、御消息、歎異鈔、口伝鈔）から、その人たちをどのようにして教え諭されたかを深く味わうことができます。ご指摘のような考え方を「本願誇り」とか「造悪無碍」と言って、中には、「積極的に悪を行なったほうが阿弥陀様の本願のお心にかなうのだ。」という人たちまで出てきたのです。

「本願誇り」の「誇り」とは、本願によって救われることに「いい気になる」という意味から、もっと進んで「甘える」という意味を持っています。「造悪無碍」というのは、「悪を造っても碍さまたげ（障さわり）にならない」、つまり「悪いことをしても極樂に往生できる」という意味です。いずれもほとんど同じ意味で使われる言葉です。これは間違った信心なので「異安心いあんじん」——キリスト教で言う「異端」と似ています——と言われます。機会があればお話ししようと思っっているのですが、異安心には他にもいろいろな種類のものが

あります。

さて、悪いことというのは、わざとやろうとしてもやれるものではありません。むしろ、やらないでおこうとしているのにやってしまうのが「悪いこと」です。

では、何故やってしまうのでしょうか。私たちの善悪の行ない（心に思い、口に話し、体で行動する）は宿業（過去の行為）によるのだというのが仏教の基本的な考え方で、善い心がおこるのは過去の善行により、悪い心がおこるのも過去の悪行がそうさせるのです。

そこで、往生のためによいことだと思ふことをやろうとし、悪いことだと思ふことをやめようとしています。ところが、実際には過去の行為の影響を受けて、心ならずも善いことも悪いこともしてしまうわけです。にもかかわらず、何でも思い通りになるといふ凡夫の浅はかな思い込みにとらわれて善いこと

を行なおうとして、「本願の不思議な力によって救っていただけなのだ」ということを信じられず疑っているのが、「自力の信」と言われる信心の段階です。

これとは反対に、「どんなに悪いことをしても救われるのだ」と言ってはばからないのはいつそう困ったもので、このような姿勢からは、教えを聞く、信じようという心はかけられられません。自力の信の人に遠く及ばない姿と言えます。聖人は「薬（本願）があるからと言って、毒（悪）を好むな。」と戒められました。

念仏の教えを聞き、「私は煩惱を備えた凡夫であって、覚りには縁遠い者である」とわかってきた人ならば、「往生のためには悪も障り（妨げ、障碍）にならない。」と聞かされることによっていつそう信心は深くなるのですが、まだ念仏の教えに縁のない人に同じことを言うと、その人を教えから

遠ざけることにしかなりません。「本願の力は強いだから、悪も怖くない」ということは、信心の人には言ってもよいのですが、未信の人には言つてはいけないことです。「教え」というのは、機（聞く人の信仰的レベル）に応じて説かれなければならない——対機説法。人を見て法を説く——ということの一つのお手本と言えるでしょう。

そこで、本願を信じて他力の念仏の生活を送るような人となると、自動的に悪は好まなくなる、というのも理の当然ですね。お尋ねの「歯止め」と言えばこれでしょうか。前に浄土真宗の現世利益についてお話しましたが、それも思い出して味わってみてください（『第十四部』参照）。

また、ご質問の全体的な趣は「正しいこと、善いことができるようになりたい。」とお考えのようにお見受けしました。仏教は——もちろん浄土真宗

も——道徳を説く教えではないので、教えの中に直接的に「歯止め」はありません。私たちが覚りに向かうことによって、自然に悪から遠ざかるという現象が起こるとお考えいただきたいのです。





## あとがき

みめぐみの刊行委員会

分かり易く読み易くと一回毎にまとめて頂きました「薪流会」での講演録も、今回「末法思想」を中心としたお話で完結を見ました。

他の宗派と交流される中から大きな視点で仏の教えを尊重なさる光道台下の姿勢を通し、私たちも真宗信者が陥りやすい排他的な姿勢に気づきたいものです。

そして、最後に「私どものご先祖が特に厳しかったこと」として「現世利益」と「先祖供養」について言及して下さいましたが、これら二つについては今後の各々の生活の中でいつそう味わいを深めたいものだと思います。

三回にわたっての講演録を通してのご感想、ご質問をお待ちしております。ふるってお寄せください。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。  
『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

## みめぐみの 第22部

---

2004年7月5日 印刷

2004年7月10日 発行

定価 200円

著者 大谷光道

発行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754  
-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120

振替口座 01060-5-56990

印刷 (株)中外日報社

---



